石川啄木全集

第六巻　日記II

筑摩書房

石川啄木全集　第六巻　日記Ⅱ

昭和五十三年六月三十日初版第一刷発行
昭和五十五年八月二十日初版第三刷発行

著　者　石川啄木

発行者　布川角左衛門

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（営業）
二九四―六七一一（編集）
振替東京六―四一二三郵便番号一〇一―九一

印刷　暁印刷　製本　矢島製本

Printed in Japan

（分類）0395（製品）76606（出版社）4604

目次

明治四十二年当用日記　三
NIKKI. I. MEIDI 42 NEN. 1909.　五一
明治四十三年四月より　一五五
明治四十四年当用日記　一八三
千九百十二年日記　二二三

*

小説断片
その人々その他　二五一
青地君　二五三
塵の悲み（小説『夜』の一節）　二六〇
鳥影　次第書　二六二
無題〈十一月八日の晩、三階の隅になつてゐる……〉　二六六

連想　二六七
束縛〈六日の晩に知人を誘つて来てくれ、……〉　二七〇
束縛〈友人N―君は突然或る不幸な……〉　二七一
古外套　二七三
足蹟（第一回）　二七五
眠れる女　二七七
島田君の書簡　二七七
坂牛君の手紙　二七七
底　二七九
追想　二八〇
宿屋　二八五
父と子　二八六
故郷に入る　二八七
空家　二九五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

無題〈私が須山と同じ本郷の下宿にゐた頃は、……〉　二九七
無題〈……女が突然自分の膝に突伏して、……〉　二九八
無題〈桶屋の一人息子の新太は、暑中休暇に……〉　三〇〇
代弁人　三〇三
村長の上京　三〇四
杖の喜劇
　無題〈田村君が言ふには、「おいおい、福山、……〉　三〇七
　無題〈「そんなに古い話ではありません、……〉　三〇九
無題〈去年の七月の初め頃と思ふ、私は妙な……〉　三一五
下駄の緒　三一七
喜劇　父の杖　三一八
金字塔　三一九
エピソオド　三二一
無題〈「この考へは何処から来ただらうか。」……〉　三二三

窓（一郵便局員の日記）　三三三
無題〈今度の風邪は却々抜けなかつた。……〉　三三四
無題〈矢沢すゑ子の其後の消息は知らぬ。……〉　三三五
無題〈世の中には、今迄何でもなかつた事柄が、……〉　三三六
不穏　三三六
無題〈或朝、朝飯の済んだばかりのところへ、……〉　三三〇
酒田川丸の船客　三三六
あきの愁ひ　三三八
牧舎の賦　三四一
高調　三四六
手を見つつ　三五三
林中日記　三五六
解説　小田切秀雄　三七七
解題　岩城之徳　三九一

日記(二)

明治四十二年当用日記

明治四十二年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一月一日　金曜　晴　曇　寒　☆四方拝

今日から二十四歳。

前夜子の刻すぎて百八の鐘の鳴り出した頃から平野君と本郷の通りを散歩し、トある割烹店で食つて二時頃帰宿、それから室の中をかたづけて、寝たのは四時近くだつたから、目をさましたのは九時過。

空は朗らかに晴れわたつてゐたが、一杯の酒に雑煮、年始状を見て金田一君の室に行つてゐると、三階をゆすぶつて強い風が起つた。そしてチラ〳〵と三分間許り雪が落ちた。

満都の士女は晴衣を飾つて巷に春を追うた事であらう。予は一人室に籠つて北海の母に長い手紙を認めた。予は其手紙に、今年が予の一生にとつて最も大事な年――一生の生活の基礎を作るべき年であるとかいた。そして正月の小遣二円だけ封じた。

三時半頃になつて出かけた。空は曇つてゐて、風つよく、寒い。廻礼の人々が電車に溢れた。予は何がなしに浮世の春が自分一人をのけ者にしてるといふ様な感じにうたれた。千駄ヶ谷に与謝野氏を訪ふ。間島長島の二君がゐた。屠蘇、夕飯。与謝野氏はスバルの前途を悲観してゐた。主要なる話はスバルに関した事であつた。六時頃間島君と電車を同うして帰り、予は平出君を訪ねた。話はこゝでもスバルの事。予は編輯を各月担任者に全責任を負はせる事を説いた。(然し吉井君には任せられない。アノ人は仕事の人でないから。)と平出君が言つた。与謝野氏は予と同意見なのだ。

町々の店は大方戸を閉ぢて、元日の東京の夜は寂としたもの。八時頃帰宿。金田一君とカルタを一回やつた。(趣味)の小説をよみながら十二時就寝。

今日は何もせずに暮した。睡眠不足の為か、何となく閑散な、気のぬけた様な日であつた。(朝日)に森田君の(煤煙)が出初めた。

〔発信〕　母へ。スバルを堀合の姉妹と函館の家へ。

〔受信〕　賀状十六通。名刺、島村盛助君。

一月二日　土曜　快晴　寒

朝はこの冬無類の寒さ、水道の栓が氷つて水が出なかつた。

九時頃に起きた。平野君が来た。スバルの編輯について少し言つてみた。平野君は少し顔色を悪くした。

僕は各月三人が一人づつ全責任を以てやる様にしようと言ふのだ。（結局権利問題だ）と言つた。そして蒲原君が吉井君をつついた事を告げてしまつた。

平野は哀れな夢想家である。

二時頃上田氏を訪うた。家々の前には盛装した少女が出てゐて、羽子を突いてゐる。東京は予をサツパリ関つてくれぬといふ様な感じがした。上田氏の書斎に通されて、二号の原稿をたのんだ。アンドレエエフの癲病患者をかいた小説の梗概をきいた。かへりに中村星湖の（半生）を買ふ。

上田氏も昴を公開的にすることを説いてゐた。

岩動孝久君が来た。吉井君が来た。三人で飯を食ふ。岩動君かへつてから吉井と本郷二丁目のトアル割烹店へ行つた。吉井は酔つた。そしてスバルの事其恋人の懐妊した事などを語つた。哀れなる男だといふ感じが、予をしてそのくだらぬ気焔をも駁せしめなかつた。そこを出て甘酒屋に入り、わかれたのは十時頃。

かへつて金田一君と一寸語つた。

何といふことなく予は心に頼むところが出来た。そして今迄平野を散々罵倒してゐたが今夜、それがあまりに小供染みてると感じた。ツマラヌ。一雑誌スバルの為に左程脳を費すべきではない。予は作家だ！

妹が外国人の家へ行つたハガキ、その返事をかきスバル一冊封じて何となく心安い。

〔発信〕妹、伊五沢文五郎、同源太郎、大貫晶川、富田砕花へ賀状出す。森川君へハガキ

妹、直太郎、正宗　へスバル。

〔受信〕賀状　二十二通。名刺、郷古君。

〔摘要〕金田一君は今日九段で山室軍平の辻説教をきいて泣いて来たといつた。（途中で詩をよんだんですね。）と予は言つた。

一月三日　日曜　晴　温　㊋元始祭

ほか〳〵した日。金田一君と談つた。十二時頃岩動康治君が来た。金田一君と三人でカルタ。岩動君帰つて将棋、そうしてるところへ中村君。さうしてるところへ在原清次郎君。金田一君と中村君は別室へ。

色々と札幌小樽の話をきいた。それから二六社の土岐君が予の事を良くなく言つてるといふ事をきいた。予は、繁劇なる新聞社会に身を投じ、中傷詰詐の渦中に入ることの利害を考へた。ビールをのみ、蜜柑を喰ふ。日くれて共に夕めし。

在原帰つて予は吉井君にハガキを書いた。曰く（第二者

第三者にとりては何の価値なき、而し僕自身には重大なる或る事を発見した。僕は昨日までの僕が憐れでならぬ。モウこれから、僕は何人にも軽蔑されない、否、軽蔑する人には軽蔑さしておいて、僕は僕で其らの人を軽蔑してやる積りだ。（ハハ……）

長い事、然り、長いこと何処かへ失つてゐた自信を、予は近頃やう〳〵取戻した。昴は予にとつて無用なものでなかつた。予はスバルのおかげで、今迄ノケ者にしておいた自分を、人々と直接に比較する機会をえた。

九時に平野が来て一時間許りゐて帰つた。この人には文学はわからぬ。人生もわからぬ。予はモウ此人の大きい呿呻におどかされぬであらう。

在原が来てるときであつた。せつ子から封書の賀状が来た。大晦日に室料を払つて五厘残つたと！　そして賀状のかげには予が金をおくらなかつた事に対するうらみが読まれる。予は気まづくなつた。あゝ、金は送らねばならなかつた。然し予は送りえたのであつたらうか？　今日は予の賀状がついて、いくらか我がいとしき妻も老いたる母も愁眉をひらいた事と思ふ。

中央公論の小説をよんだ。今日も客の為に時間を喰はれて何も書かぬ！

〔発信〕　吉井勇君
〔受信〕　賀状十九通　名刺岩動康治君

一月四日　月曜　雨　晴　温

雨がヒドク降つてゐた。午前は金田一君と語る。午飯がすむと雨がやんで雲がきれた。

伊東に帰つた太田君からハガキ。予の『赤痢』をモ少しシムボライズしたかつたと言つて来た。巳酉第二の封書を認めて送つた。その中に、予は予の現在の心持をかいた。スバルの事、及び平野吉井を蹴つたこと。〝荒布橋〟の事。太田が絵にする（小説脚本を）こと。書き了へた時、赤い日が西の山に沈みかけて、晴れあがつた空に紙鳶が一つ浮んでゐた。

京都の瀬川深君から久振の、そして興のない手紙。

太田へ手紙かいてる時、平野は夏目氏を訪はないかと言つて来たが、予は行かなかつた。

日がくれた。今夜は金田一君発起の加留多会。原君、菅野君、小笠原君、下斗米君、に宿の親類といふ大仁うた子、外二三人。十二時頃までやつた。大分元気がよかつた。

〔発信〕　太田正雄君へ封書。真々田薫君へ賀状
〔受信〕　賀状二十五通。瀬川深、太田正雄二君より消息。

一月五日　火曜　晴　温　※新年宴会

今日はよい日であつた。

臼杵の平山良子から手紙、スバル半ケ年分前金と、〃佐保姫〃代金二円三十二銭為替でよこした。畠山亨君からも封書。

モ一通の封書は札幌なる橘智恵子さんからであつた。函館時代こひしく谷地頭なつかしくとかいてある。げになつかしいたよりではあつた。遠山女史樺太にゆき、日向女史出産、高橋すゑ子（嘗て中学生と噂あつてやめたといふ）が森の学校に赴任したことなどを初めて知つた。

金田一君の室で岩動君と将棋、二度やつて引分けたが、予の方がつよかつた。昼食中中村唯一君も来た。そこへ吉井君が来たので室にかへる。

一昨日やつたハガキは充分に功を奏してゐた。今日は頭から吉井を圧迫した。そしていつしかしめやかな結婚家庭などの話を吉井がし出した。夕方、編輯会議をひらくことについての平出平野にあてたハガキを持つて帰つて行つた。

湯に入つて、金田一君と二人、六時頃出かけて小石川原町に中村君の加留多会へ行つた。サツパリ気がはづまなかつたが、冷たい空気の正月ながら充ち〳〵てゐるかの家をみたのはアナガチ無用でなかつた。帰りは十二時、途中、敵国をあるく時のまねをすると言つてイタヅラしながら夜の路をあるいた。

今日渋民の駒井善吉秋浜三郎の二人から賀状が来た。うれしかつた。

斎藤大硯君より函館日々新聞十五週年記念号を送つて来た。

〔発信〕　山西薄明、三重野牧雨へ賀状。善吉三郎へエハガキ、平野平出へハガキ。

〔受信〕　賀状十三通。

一月六日　水曜　曇　温

風邪の気味で一日鼻がつまつた。朝は金田一君より先におきた。

平野から（ハガキにて御質問ゆゑハガキにて御返答仕候）云々のハガキ、会議は開かなくてもよいではないかと、少し怒つた口調で言つて来た。予はうれしくなつた。わざと一日ハガキも出さず電話もかけぬ。

午前に斬髪し、昨日の為替をうけとり、スバルを三部買つて来て平山、橘、高野の三人へ。平山へ手紙、高野へハガキ。

正午から智恵子さんへ手紙をかき出した。夕方並木君来た。一緒に飯。笑はせクラをしてさわいでると伊東圭一郎君。

相不変痔がよくないさうな。この人は気取らないといふことを気取つてる人だ。しかしなつかしかつた。岩動君宅のカルタ会には金田一君に先に行つて貰つて、一時間許り話した。それから一緒に出て、電車の中で高々と盛岡弁で語りながら江戸川終点で下車。わかれて予は一人岩動君宅に行つた。立派な家だ。

カルタはつまらなかつた。金子といふ日詰の人にあつた。

十一時辞して関口の天プラヤの二階で金田一君と共に江戸川の水音をきゝ、かへつて来たのは十二時半。それから智恵子さんへの手紙を書了へた。

今日、日景君から賀状と共に釧路新聞の新年号を送つて来た。ハガキ一枚で仲直りなんか面白い！

山城正忠が名刺をおいて行つた。

九日の歌会にの招待状森先生お家から。

〔発信〕平山良子橘智恵子へ封書。高野桃村へハガキ。

〔受信〕森林太郎、平野万里、よりハガキ。賀状十四通

〔摘要〕小日向台の下、水道町に救世軍の女三人（一人はハタ）男一人ゐた。〝いまわが心は雪より白く……ト見ると大館光！

一月七日　木曜　曇　温

おそく起きて朝飯をくはぬ。

風邪が昨夜電車での寒さで強くなつたやうだ。頭脳が一所に集中しない。

久振で菅原芳子に手紙かいた。吉井には昨日の平野のハガキを写して出す。

新年の諸雑誌をあさつた。正宗真山二氏のはドノ号のもうまい。描写の技倆に於ては、青果氏は当代一、そして正宗氏のに至つては、更に何者か人生のかくれたる消息を伝へてゐる。〝早文〟に出た（地獄）も全く感服した。

夜九時頃であつたらう。昨夜も名刺をおいて行つた山城正忠君が来た。酒を七合のんで来たと言つて、大分酔つてゐた。独歩集を几の上からはなしたことがないと言ふ。嘗て予によこしておいた（路傍の人）はその閲歴だといふ。予はそれについて、赤裸々に所見を言つて、返した。

哀れなる感情家！

いろ〳〵なことをさも情にたへぬといつた様に語つて、十二時に帰つて行つた。

この日伊東なる太田君から絵をかいたハガキ。（――こ

ないだもね、当地の茶屋でもつて荒布橋をやつたが、少し手傷を負つた。だが何しろ故郷はやはらかいところだな。おまけに温泉までがある。併し海だ。あんなに大きく恐ろしいもののくせに、その漣のひびきのやさしいつたらないからな。——八日にかへる。)

日高の大島君からも賀状。

〔発信〕 菅原芳子へ封書、吉井君へハガキ。

〔受信〕 賀状九通。太田正雄君ハガキ。

〔摘要〕 風邪。

一月八日　金曜　曇　寒

おそく起きた。咽が痛い。しきりに咳が出る。頭が半分いたい。

(塵の悲哀)をかかうとして半日考へたが、どうも思慮が集中しない。(水声)を書かうとして結構漸く出来た午後四時頃、平出から昂の会議をやるとの電話。

すぐ行つた。平野吉井平出、アトから川上君、与謝野氏、栗山君、都合七人で九時ごろまでやつた。意見はすべて予の言ふことが通つた。平野は大分予が物をいふ度に不快な顔をしてゐた。

予は勝つた。編輯担任者はその号に全権をもつことにした。そして平野がやると言つてゐた短歌の添削までもとりかへした。平野の言ふことは皆やぶれた。

かへり、三丁目で電車をおりてから、平野と方々の雑誌屋の店に立つた。そして予はその時も勝つてゐた。二人は、否平野の方から、いろ〳〵つまらぬ雑誌の売行の話などをした。

そばをくつてかへる。少し熱が出た様だ。留守中に太田正雄君が来たとかで名刺があつた。今日帰京してすぐ来てくれたのであらう。

吉井は昨日から尾久村の別荘の方へ行つてるげな。

浅草公園第五区九九、分吉野やつや子なる女から毎日社内宛で年始状が来た。予の小説の名と住所をしらしてくれと——分吉野やは植木の妹すみ子のゐる所ときいた。これは屹度彼女が予の住所を知らむとする策略だらう。

立花直太郎君は(赤痢)のお由婆の性格がよく描かれたと言つて来た。お由はまだ生きてると見える。

玉子湯をのんで寝た。

〔摘要〕 風邪、昂の相談会

〔発信〕 金星会規則二通。返稿一。

〔受信〕 賀状四通。立花直太郎君ハガキ。つや子よりハガキ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com